

# ワイルドと消費\*

本 間 里 美

## 1. はじめに

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) は、大衆の消費行動と芸術の関係を常に意識していた芸術家であった。ポール・フォルトゥナート (Paul L. Fortunato) が『*Modernist Aesthetics and Consumer Culture in the Writings of Oscar Wilde*』の序文で、「コンシューマー・モダニズム」であると評したように、ワイルドは消費者不在の芸術が存在しないことや、芸術が消費者に与える影響を意識することで、時代の寵児へと上りつめた。ワイルド自身も旺盛な消費意欲を見せ、ダンディーを気取った豪華な衣服を身に纏い、恋人のために大いに金を費やした。そのワイルドが投獄され<sup>1</sup>、一般的な消費や生産とは隔絶された状況下で作品を書いた。それが、恋人アルフレッド・ダグラス (Lord Alfred Douglas, 1870-1945)、通称ボジー (Bosie) に宛てた書簡『獄中記』 (*De Profundis*, 1962)<sup>2</sup>である。そのなかで、ボジーへの恨み辛みや、かつての華々しい地位を失ったことへの激しい後悔を語る一方で、自身を失墜させたボジーに赦しを与え、苛酷な獄中生活をキリストの受難と重ね合わせて、聖人のような境地に達しようともしている。この矛盾のために、これまで『獄中記』には様々な解釈がなされてきた。例えば宮崎かすみは、ワイルドは「『獄中記』の最後で静謐な境地」にたどりついたと述べ (217)、メリッサ・ノックス (Melissa Knox)

---

\* 本稿を作成するにあたり、十枝内康隆先生 (北海道教育大学旭川校) に内容や書式に関するご教示、ご助言をいただき、深く感謝申し上げます。編集委員長の野村忠央先生、そして匿名の査読委員の先生に、記して謝意を表します。

は、ワイルドは『獄中記』を通してロンドンの花形に返り咲き、自尊心を復活させることを目的としていたと主張し(117-18)、リチャード・エルマン(Richard Ellmann)は、『獄中記』はかつての自身の偉大さを讃えたエレジーであると言っている(514)。ワイルドは苦悩のなかで「謙抑」(“absolute Humility”)を発見した(CW, 1018)と語っているが、『獄中記』において言葉通り彼は「謙抑」という境地にたどりつくことができていたのだろうか。本稿では、ワイルドと消費の関係、『獄中記』において「謙抑」が発見された可能性があるのか否か、『獄中記』は出版によって金を稼ぐ意図で書かれたのか、という観点から『獄中記』に表れたワイルドの思いに迫る。

## 2. ワイルドと消費の関係

『獄中記』におけるワイルドを探るためには、ワイルドと消費の関係を考察する必要がある。それはワイルドが、大量消費時代を迎えたイギリスにおいては、消費と芸術が不可分のものであることをいち早く認識して創作を行い、さらに自身でも飽くなき消費行動に走った人物でもあったためである。

産業革命に成功したイギリスでは、経済的余裕を得た中産階級も旺盛な消費意欲を示すようになり、19世紀末には人々の関心は生産や繁殖から消費へと移行して、商品に対する個人的な要求に焦点があてられるようになった(Gagnier, *The Insatiability of Human Wants* 93-94)。かつて個人の欲求を自由に消費で満たすことができたのは、貴族など一部の有閑階級に限られていたが、経済的発展によって消費の自由が中産階級にまで拡大し、産業革命の技術革新によって製品の大量生産とその物流が可能になり、大衆の消費行動に関心が集まったのである。ワイルドは芸術もまた、この大衆の関心に依存する消費形態の対象外ではないと気づいていた。フォルトゥナートは、ワイルドは芸術と商業の相互依存関係を認識しており、演劇や批評を通して大衆の消費行動に影響を与え、大衆の消費行動によって文化の形成を試みた人物であると述べている(89)。定期刊行物や劇場は、それら存続させるのに十分な消費者が存在しなければ商業的な成功を得られず、芸術として成立しない。したがってワイルドは大衆の好みから逸脱しないよう注意を払っていたことが、『ウィンダミア卿夫人の扇』(*Lady Windermere's*

*Fan*, 1894) を例に挙げて説明されている (Fortunato 100-01)。『ウィンダミア卿夫人の扇』では、ウィンダミア卿夫人 (Lady Windermere) は夫と子を捨てて駆け落ちしようとするが、母アーリン夫人 (Mrs. Erlynne) の助けを借りて家庭に戻った。さらに、ウィンダミア卿夫人はアーリン夫人を母とは知らずに嫌悪していたが、この出来事によって2人の間には友情が生まれた。この作品は、ピューリタニズムに基づく良妻賢母という当時の倫理観から逸脱しないために、大衆に受け入れられて商業的、芸術的な成功を収めた。

ワイルド自身も盛んに消費を行なった。その消費の特徴のひとつは、ダンディズムの体現にある。山田勝がダンディズムとは「人間の造りうる至高の美を、自己の肉体を媒介にして表現すること」(「ダンディズム—慈愛の心とダンディズムの本質」, 170) であると述べているように、ワイルドは服装で飾り立てた肉体によって自身のダンディズムを世間に示した。そして同時にそれは、ヴィクトリア朝に蔓延した勤勉や節約というピューリタン道徳への反逆のためだと論じられている (「ダンディズム—慈愛の心とダンディズムの本質」, 172)。したがって、ワイルドは作品を書くときには、読者であるピューリタン精神に染まった大衆の道徳観から逸脱しないよう細心の注意を払って金を稼ぎながら、自身の装いなどの消費行動を通してはピューリタン道徳に反抗していたことになる。

ワイルドが服装に執着したのは、ダンディズムの精神のためだけではない。派手な服装を纏うことによってロンドンに自身を宣伝したことは言うまでもなく、アイルランド出身の田舎者であるという引け目から豪華な装いに憧れたのだという指摘もある (山田, 「オスカー・ワイルド研究: 身辺の芸術 (1)」, 86-88)。1891年頃にボジーと出会ってから消費に拍車がかかり、ワイルドはボジーとの遊興費のために莫大な浪費をして借金を抱えることになったが、名門貴族の子息であるボジーとの交友には、貴族ではないワイルドの上流階級への憧れが多分に含まれていた。したがって、彼の消費にはダンディズムによって時代に反抗する精神を示すだけでなく、有名になるための手段、貴族のように振舞いたい欲望、恋人をつなぎとめる役割など様々な俗物的な欲求も包含されていた。

ワイルドは大衆の消費行動と芸術の関係を強く認識して創作を行うことで、人気を博して金を稼ぎ、その金で大いに消費を行い、ダンディズムの

精神を示すなど、自身の欲求を満たしていた。『獄中記』は、このような投獄以前の消費と隔絶した環境で書かれた作品である。したがって『獄中記』のなかでワイルドが到達したと述べている「謙抑」という境地にも、消費が関連していると考えられるのである。

### 3. ワイルドが「謙抑」を発見していた可能性

『獄中記』でワイルドは本当に自身のなかに「謙抑」を見出すことができていると言えるのか、過去への反省、ボジーへの赦し、金銭に関する道徳的な改心という3つの観点から考察する。ワイルドは『獄中記』において、過去にダンディーとしての消費行動をとったことや、ボジーらと過ごすために俗物主義的消費を行なったことに関して「わたしは長の年月にわたってわが身を愚かしい官能の安逸へ誘い込まれるに任せたのである。遊び人、<sup>フラスール</sup>ダンディー、伊達男、社交人であることを楽しんだのである。私よりもちっぽけな性格とけちな精神のやからを取り巻き連にしたのである」(CW, 1017-18)と述べて猛省している。この記述からは、衣服に固執して金を注ぎ込み、ダンディーを気取って浪費していた過去への後悔を読み取ることができる。ワイルドが取り巻きにしたという「私よりもちっぽけな性格とけちな精神のやから」とは、彼と頻繁に饗宴に耽ったボジーや男娼のことを示唆していると考えられる。男娼やボジーとの関係がワイルドを監獄へ送り込んだ直接的な原因であるため、ワイルドがその関係を後悔することは当然である。それに加えて、ここでは彼らに対して行なった消費に対する後悔の念も含まれているのではないか。『獄中記』では、ボジーがワイルドの金を散々乱費したことが詳細に記載され、それに対する批判が繰り返されている。ワイルドはこのボジーの消費行動を俗物的なものと思なしていたと考えられる。ワイルドはキリストと比較して俗物主義を「想像力の光に照らされぬ側の人間に過ぎない」(CW, 1036)と評し、ボジーに向かっては「想像力の欠如がきみの性格の唯一の致命的な欠点」(CW, 1001)であると言っていることから、彼がボジーを俗物主義者であると考えていたことがわかる。したがってワイルドは、男娼への浪費は言うまでもなく、俗物主義者であるボジーを満足させるために浪費したこともまた悔いたのである。過去の欲望に身を任せた消費行動を直視して書くことは、自身の罪を明確に自覚す

る行為であるため、それは改悛の表れであると言える。

ボジーを批判する一方で、ワイルドは彼に赦しを与えようともしていた。『獄中記』の前半では、ボジーがワイルドの金銭を乱費したことや創作活動を妨害したことなどについて延々と恨み言が書き連ねられている。しかし自身のうちに「謙抑」を発見したと言った後に、ワイルドは以下のように述べる。

…赤貧の合財袋と襤褸衣に甘んじなければならぬとしても…あらゆる憤懣と、苛酷と、軽蔑から自由であるかぎり、わたしは王者の美服を身にまといながら、その美服に包まれたところは憎しみに触まれていたときのわたしよりも、はるかにおちつきと自信を持って人生に対することができるであろう。そしてきみを許すことにほとんどなんの困難もないであろう。(CW, 1019)

自身を貶めたボジーを赦すことは、過去の反省よりも高尚な行為である。ワイルドは『獄中記』後半でキリストに言及し、獄中生活という受難に耐えた自分自身をキリストに重ね合わせるように語り、キリストが罪人を赦したように、罪深いボジーを赦そうとした。加えて上記の引用では、財産や服装に言及されていることにも注目したい。この引用からは、投獄以前は貴族に憧れて贅沢な消費を好み、ダンディーを気取って衣服に金を費やしたワイルドの、地位や外見へのこだわりを捨て、精神の安寧を得ようとする心境の変化も読み取ることができる。したがってボジーへの赦しは、世俗的な欲求への執着を捨てる心境とも関連していると言える。

ワイルドの借金に関する概念にも道徳的な改善が見られる。レジニア・ガニエ (Regenia Gagnier) は「監獄の外のワイルドにとって借金の美学とは皮肉な喜びと消費を指すが、獄中のワイルドにとっては借金の美学とは品行や道徳を指す」(*The Insatiability of Human Wants*, 161) と指摘し、『まじめが肝心』(*The Importance of Being Earnest*, 1899) のグリスビー・エピソード (“The Gribbsby Episode<sup>3)</sup>”) のアルジャーノン (Algernon) の台詞と、『獄中記』の記述を比較している。ダンディー気取りで修辞を弄ぶ皮肉屋アルジャーノンは、借金返済を求めてやってきた弁護士グリスビー (Gribbsby) に対し、「借金を払うだって。どうしてわたしがそんなことをするだろう

か。あなたもわたしが金を持っているなどとは思わないでしょう。なんて馬鹿なんだ、あなたは!」と言い放つ(CW, 385)。しかし『獄中記』では、ワイルドの借金に対する態度は一変する。「わたしの持っているもの、持つはずのものをすっかり取り上げられ、どうしようもない支払い不能者として放免を許されたときでさえ、それでもなお借金を払わなければならないのだ」(CW, 1055)と述べ、ワイルドは借金を返すものであると考えるようになっていく。さらに金銭に関する改心は、『獄中記』以外の書簡にも表れている。『獄中記』執筆中であつたと思われる1897年3月8日に、ワイルドはモア・アディー(More Adey, 1858-1942)に宛てた書簡で出獄後の生活の展望に言及し、簡素で慎ましく暮らして「儉約という美德」を实践するつもりであると述べている(Letters, 681)。投獄以前には乱費し、借金をしてもダンディーを気取ったワイルドが、「儉約」を「美德」と見なすようになった。この概念の大きな変化もまた、『獄中記』執筆の最中に、ワイルドのなかで金銭に関する道徳的な改心があつたことを示している。

このように、過去への反省、ボジーへの赦し、金銭面での道徳的な改心という点からは、ワイルドが獄中の苦しみから、「謙抑」を自己のなかに見出した可能性を読み取ることができる。

#### 4. ワイルドが「謙抑」を発見できなかった可能性

一方で、『獄中記』においてワイルドが「謙抑」という境地を発見できなかった可能性もある。この可能性について、ボジーへの執着、社会的地位への執着という観点から考察する。ワイルドは『獄中記』の最後において、ボジーに「おそらくわたしたちは互いにもっと知りあわねばならぬのだ」(CW, 1059)と語りかけ、出獄後のボジーとの再会を望んでいる。ボジーを赦そうとしているものの、そのボジーが想像力を欠いた俗物主義者であることを、彼に投獄にまで追い込まれたワイルドは熟知していた。さらにワイルドは、彼の想像力の欠如の原因を遺伝であると考えていた。ワイルドは、ボジーの母シビル・モンゴメリー(Sybil Montgomery Douglas, 1845-1935)が、彼の金銭関係における行動や墮落は、「因果なダグラス家の気質」の遺伝が原因であると憂えていることに言及して、それはワイルドの彼に対する見解と一致するものであると述べている(CW, 988-89)。彼

女が「因果なダグラス家の気質」と言うように、ダグラス家からは、激昂しやすい性格や精神が不安定な人物が間々誕生していた<sup>4</sup>。ボジーもその例外ではなく、異常な浪費癖と強い虚栄心だけではなく、ワイルドに身の危険を感じさせるような暴力性も持っていた。ワイルドはこれらの気質を遺伝であると認識していたために、出獄後に会ったとしてもボジーのその気質が変化しないことを理解していたと考えられる。したがって浪費家のボジーとの再会によって「節約の美德」の体現を阻止され、かつての俗物的消費行動の再開を強いられる可能性があったことに、ワイルドが気づかなかったはずがない。

ワイルドがボジーに固執したのは、ただ彼を愛していたからというだけではない。ボジーへの固執は、投獄される以前の、時代の寵児だった地位への固執の表れである。川崎淳一郎が「美形のボジーの存在こそが、たえずワイルドの想像力を掻き立てるのに不可欠な刺激剤となっていた」(122)と述べているように、ワイルドはボジーと出会った1891年以降に傑作を次々と世に送り出した。厳しい獄中生活によって創造力が衰退したことを自覚していたワイルドは、作品を生み出してかつての華々しい地位に返り咲くためにもボジーを必要としたのである。実際に、出獄後フランスに渡り、ボジーと話し合いを重ねるなかから書き上げられた『レディング監獄の唄』(*The Ballad of Reading Gaol*, 1898)は、彼の作品のなかで最高の売り上げを記録している。ノックスは、1897年5月6日にワイルドがモア・アディーに宛てた書簡を引き合いに出し、『獄中記』の目的は、ロンドンの花形であったワイルドの虚栄心の復活、そして自尊心の復活であると主張している(Knox 117-18)。この書簡のなかでワイルドは、自身の纏う衣服、ハンカチ、香水、石鹸に到るまで詳細な指示を出し、それらを出獄時に向けて準備するようモア・アディーに依頼した(*Letters*, 808-09)。『獄中記』が執筆されたのは1897年1月から3月の間であり、この書簡が書かれたのは同年5月6日であるため、この書簡の存在によって『獄中記』の最後にワイルドが「謙抑」を発見していなかったと論じることはできないかもしれない。しかし、ボジーと会うことを望んだ理由が創造力の回復であり、かつての地位への復位ならば、『獄中記』執筆中にさえ、衣服や装飾品を求め、ボジーに金を費やし、節約とは無縁の生活を送りたいと考える世俗的な欲求がワイルドのなかに存在した可能性を打ち消すことはできない。

## 5. 『獄中記』 執筆の意図

以上のような観点からの分析を試みても、ワイルドが『獄中記』を執筆中に自身のなかに「謙抑」を発見できていたのか判断することはできない。そこで、『獄中記』は金を稼ぐ目的で書かれた作品なのか、という点からも考察したい。1897年5月19日に出獄してから、1900年11月30日にワイルドが亡くなるまで3年以上の月日があった。その間、ワイルドは友人から借金しなければ生活できないほど困窮し、1897年6月にボジーに宛てた書簡では「すぐに金を作らなければこの夏が過ぎたあとどうしていくか全然わからない」(Letters, 872-73)と嘆いているほどだったにも関わらず、自身の手で『獄中記』を出版することはなかった。ボジー宛ての長い書簡は、1905年2月23日、ロバート・ロス(Robert Ross, 1869-1918)によって『獄中記』というタイトルをつけられ、大幅に削除されて、ワイルドの死後に出版されたのである。しかし実際には出版しなかったものの、ワイルドに出版の意思があったならば、『獄中記』は金を稼ぐことを意図して執筆された可能性があることになる。ガイとスモール(Josephine M. Guy and Ian Small)は、ワイルドの執筆の動機の大部分はいつも商業的なものであり、稼げば稼ぐほどますます乱費し、借金がかさめばかさむほどますます稼ぐ必要に迫られたワイルドの窮状は、彼の生涯においてほとんど変化がなかったと述べている(21-22)。彼らの主張通り『獄中記』もまた出版を念頭に置いて金を稼ぐ目的で書かれたものならば、ワイルドは浪費家のボジーと再び生活をともにしてかつての地位へ返り咲く野望を秘めていたことになる。ガイとスモールは、『獄中記』は出版を意図して執筆されたものであると断言し、その証拠のひとつとして1897年4月1日にロスに宛てた手紙を挙げている。この手紙のなかでワイルドは、ほかの出版された作品と同様に、『獄中記』もタイピングしてコピーするようロスに詳細な指示を与えている(Letters, 781-82)。これは、出獄後にさらに手を加えるなどして、ワイルドが『獄中記』を出版する意図の表れだったというのである。加えて『獄中記』はボジーの手に渡る前に多くの人物に読まれている点、ワイルドが『獄中記』にタイトルをつけていた<sup>5</sup>点などからも、それはただのボジー宛てのラブレターではないと主張されている(Guy and Small 214)。

さらに、監獄内で『獄中記』は何度も書き直されていたことが、ルパート・ハート・デイヴィス (Rupert Hart-Davis) によって指摘されている。ハート・デイヴィスは *The Complete Letters of Oscar Wilde* の注において、ワイルドはレディング監獄の監獄長ジェームズ・オズモンド・ネルソン (James Osmond Nelson, 1859-1914) から特別なはからいを受け、監獄内においても『獄中記』の複数の原稿を同時に見ることを許可されていたために、徹底的にその内容を訂正できたと述べている (683n)。『獄中記』が単なる手紙であれば、その内容が徹底的に訂正される必要はないが、ワイルドはそれを行なった。この点からも、ワイルドに『獄中記』出版の意図があった可能性を見てとれる。

しかし一方で、『獄中記』出版の意図は、金を稼ぐ目的ではなかった可能性を示唆する主張もある。ガニエは、読者を想定せずに書かれたワイルド唯一の作品が『獄中記』であるという興味深い指摘をしている。「批評、戯曲、『ドリアン・グレイ』、さらに獄中で出会った死刑囚のことを詠った『レディング監獄の唄』さえも読者を想定して書かれているが、『獄中記』だけは読者の不在を埋めるためにボジーを使ったのみであり、ボジーは価値のない読者のイメージである」とガニエは主張しているのである (*Idylls of the Marketplace*, 180)。投獄以前のワイルドにとって、読者が無価値であるという状況はありえなかった。ワイルドは、自身の芸術が消費されることによって大衆に対する影響力を獲得し、文化を形成し、「現代の芸術と文化にたいしてもろもろの象徴的な関係に立っている人間」(Wilde, *CW* 1017) となったのである。そのことを熟知していたワイルドは、『ウィンダムリア卿夫人の扇』のように、大衆のモラルからかけ離れることがないように配慮しながら作品を書いていた。ガニエの主張のように、『獄中記』における読者の存在がワイルドにとって無価値であったならば、ワイルドは読者の価値観を考慮する必要がなかったことになる。それならば、読者の価値観から逸脱する可能性のある『獄中記』は、大きな収入にならないことをワイルドは認識していたのではないか。

ワイルドが読者を無価値なものともみなすようになったのは、監獄の影響であるとガニエは主張する (*The Insatiability of Human Wants*, 164-65)。監獄で自由を奪われたワイルドは、生産者でも消費者でもない状況を経験することになった。ワイルドは監獄でマイハダ積みなどの行刑を与えられた

が、それらは意味のない労働で生産性はなかった。衣食も与えられたが、それは監獄の外の世界で人々が自由に選択できる消費行動とは全く異なっていた。そのような特殊な状況下で、自伝的要素をふんだんに盛り込んだ『獄中記』を書き上げ、ワイルドは自身の思想を自由に語ることで発狂する恐怖に打ち勝った。それならば、ワイルドが自ら語るように、苦悩のなかで、自身のなかに「謙抑」という境地を発見していた可能性もぬぐいきれないのである。

## 6. おわりに

以上のように消費の観点から『獄中記』を考察したが、やはりワイルドが真に「謙抑」を見出していたのか判断することは難しい。『獄中記』を執筆中のワイルドは、ときには過去を反省し、ボジーを赦し、道徳的に改心したようにも見える。しかし一方で、ボジーや社会的地位に固執し、投獄以前のようなダンディズムを体現した生活を送りたいという欲求も垣間見える。また、ワイルドが『獄中記』を他の出版された作品と同様に扱いつつも、実際には出版しなかったことを考えると、それが金を稼ぐ目的で書かれたのか否かを見極めることも困難になる。本稿でのワイルドと消費の関連の考察においては、『獄中記』において「謙抑」を発見できていたのか否か、どちらかを示す決定的な要素を掴むことはできなかった。したがって、ワイルドは一見相反する「謙抑」という聖なる境地と世俗的な欲望の間を大きく揺れ動き、あるいは聖と俗の感情を同時に抱くことで、『獄中記』を完成させたのではないかと考えられるのである。

### 注

1. 1895年5月25日、男性同性愛の罪で刑法改正令第11条項に反したとして、ワイルドは有罪判決を受け、2年間の強制労働の刑に処された。
2. 『獄中記』は1962年にハートーデイヴィスにより初めて完全版が出版されているが、本稿の引用の日本語訳には『オスカー・ワイルド全集6』（西村孝次訳、青土社、1988年）を使用した。
3. 『まじめが肝心』ははじめ4幕で構成されていたが、「グリスピー・エピソード」が省かれるなどして後に3幕に修正された。
4. ボジーの父クイーンズベリー侯爵（ninth Marquess of Queensberry, John Sholto

Douglas, 1844-1900) は乱費や女遊びで家庭に不和を招いただけでなく、首相であったグラッドストーン (William Ewart Gladstone, 1809-98) やヴィクトリア女王 (Alexandrina Victoria, 1819-1901) と揉め事を起こしていた。ボジューの祖父 (eighth Maquess of Queensberry, 1818-58) は射撃の際に事故死、叔父 (James Edward Sholto Douglas, 1855-91) は咽喉を切って自殺している。

5. ワイルドは『獄中記』に『牢獄につながれた者の手紙』(*Epistola: in Carcere et Vinculis*) という題名をつけていた。

### 参考文献

- Ellmann, Richard. *Oscar Wilde*. New York: Vintage, 1987. Print.
- Fortunato, Paul L. *Modernist Aesthetics and Consumer Culture in the Writings of Oscar Wilde*. New York: Routledge, 2007. Print.
- Gagnier, Regenia. *Idylls of the Marketplace*. California: Stanford UP, 1986. Print.
- . *The Insatiability of Human Wants*. Chicago: U of Chicago P, 2000. Print.
- Guy, Josephine M. and Ian Small. *Oscar Wilde's Profession*. New York: Oxford UP, 2000. Print.
- 川崎淳之助「書簡『獄中記』を中心に—赤裸な心の遍歴の記録」『オスカー・ワイルドの世界』富士川義之・玉井 暉・河内恵子編著 (開文社, 2013年) 113-34.
- Knox, Melissa. *Oscar Wilde: A Long and Lovely Suicide*. Yale: New Heaven, 1994. メリッサ・ノックス『オスカー・ワイルド—長くて、美しい自殺』玉井暉訳 (青土社, 2001年)
- 宮崎かすみ『オスカー・ワイルド—「犯罪者」にして芸術家』(中公新書, 2013年)
- Wilde, Oscar. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. London: Fourth Estate, 2000. Print.
- . *The Complete Works of Oscar Wilde*. Ed. Merlin Holland. 5th Ed. London: Collins, 2003. Print. オスカー・ワイルド『オスカー・ワイルド全集6』西村孝次訳 (青土社, 1988年)
- 山田 勝「オスカー・ワイルド研究：身辺の芸術 (1)」*Osaka Literary Review* 第8号 (1969年6月) 83-102.
- . 「ダンディズム—慈愛のこころとダンディズムの本質」オスカー・ワイルドの世界』富士川義之・玉井 暉・河内恵子編著 (開文社, 2013年) 166-79. (北海道教育大学非常勤)
- opeko\_kohime@yahoo.co.jp